

## 松村パッサイ考

那覇市文化協会空手文化部  
部会員 小林流 梶川英昭

小林流空手道の初代会長である知花朝信先生が書かれた「<sup>パッサイ</sup>拔砦の型（松村派）とその解説」の中で「<sup>パッサイ</sup>拔砦の型には松村派と糸洲派とがあるが、此処にその二つの中で松村派の拔砦の型を解説することにしたい。私は此の型を多和田氏より教伝を受けたもので、恩師糸洲先生より伝えられた拔砦は他の機会にゆづることとする。」（「知花朝信師型（形）分解写真資料集」沖縄小林流空手道協会より）」とあるように、首里手の形のパッサイには糸洲安恒先生の名を冠した「糸洲のパッサイ」松村宗棍先生の名を冠した「松村のパッサイ」大きく分けて二つの流れがあるとされます。恩師である小林流第二代会長、宮平勝哉先生の「沖縄小林流について」（第1回国際親善沖縄小林流空手・古武道演武大会プログラムより）によれば、現在のように空手の形を流派で体系化したものをいくつも学ぶようになったのは比較的新しいもので、「昔の大家と呼ばれた先生方はあまり沢山の形の習得は好まず、二、三の形を深く研究する風があり、自分が納得しない形は決して他に教えようとはしなかった」ようで、それぞれに得意形を持っていて、自分の得意とするその形を深く掘り下げて学び、武力を高めていくというのが普通であったようだ。先生方も門弟に「あの形はあの先生に教わりなさい」と、自分の得意形でないものに関しては何のこだわりもなく他の先生を薦めるといった具合なので現在の小林流で知花先生が伝え、私たちが宮平先生から教えを受けたパッサイは知花先生が糸洲先生から直接学んだ「糸洲のパッサイ」多和田先生から学んだ「松村のパッサイ」ということになる。

どちらのパッサイも独特な手法である「鉤手受け」や下段の「手刀受け」半身になったの「中段外受け」、また「諸手突き」などが特徴的で、緩急自在に連続技を繰り出し、非常に実践的な形と言えるが「松村のパッサイ」と「糸洲のパッサイ」との相違点も要所要所にあり、例えば松村には蹴りが含まれるが糸洲にはそれがない。逆に糸洲にある一寸、拳一個分弱だけの突き込みで「アテファ」を実現する技が松村にはない。おそらくそれはそれぞれの大家の先生の得意とする技が盛り込まれていることを如実に表していると思われる。

小林流のもう一つの代表的な形である、スピードと見るからに激しい動きが連続する威力十分な「クーサンクー大・小」とは明らかに質の異なる形であるが、昨年、演武した「糸洲のパッサイ」と比較しても今回の「松村のパッサイ」は悠然としたなかにもきびきびとした鋭い動き、後ろから攻撃してくる相手を刀峰受けで受け、すかさず蹴りを入れる手法など、独特な技に着目して見て頂きたい。